

## シンポジウム 2：臨床検査技師の大学院教育を考える：現役大学院生からのメッセージ

## 1. 司会のことば

## —本シンポジウム企画の目的と経緯—

奥宮 敏可\*

平成 28 年 8 月 1 日現在で、日本臨床検査学教育協議会の会員校として登録されている臨床検査技師養成施設は 84 施設存在する。その中で、3 年制の専門学校は 24 校で短期大学は 5 校、大学院を併設した(あるいは併設予定の)4 年制大学は 55 校(約 65%)存在する。3 年制と 4 年制の教育施設の違いは単に教育年限の違いだけでなく、Admission policy (AP：入学者受入方針)、Curriculum policy (CP：教育課程の編成・実施方針)ならびに Diploma policy (DP：学位授与方針)が異なることは言うまでもない。全国の約 65% の教育施設が 4 年制となり、現在、短期大学や専門学校から 4 年制に移行する準備を進めている教育施設も少なくないと聞いている。時代がより高度な知識と態度ならびに技能を有し、研究マインドを持った臨床検査の専門家を求めていることは自明の理である。このような時代の趨勢の中では、4 年制のみならず 3 年制教育施設の卒業生も含め、大学院教育の重要性が強調されている。これまで、多くの臨床検査関連の学会等で、臨床検査技師の大学院教育に関するシンポジウムやパネルディスカッションが行われてきた。しかし、そのシンポジストやパネラーは、教員や現場の実習指導者等であり、今現在、大学院教育を受けている学生が演者として大学院教育の中で経験した様々な事象

に対する意見やコメントを発表する機会はなかった。そこで、多くの 4 年制大学が大学院を併設し、既に修士や博士の学位を授与している現在、これまでの大学院教育の成果を総括・検証する意味も含めて、現役の大学院生をシンポジストとしてシンポジウムを開催し、大学院教育の現状と今後改善すべき点等を議論することを目的として「大学院生によるシンポジウム」を大学・大学院教育委員会が企画することとし、第 11 回日本臨床検査学教育学会学術大会の大会長の坂本秀生先生(神戸常盤大学)にご相談した。坂本先生から力強いご支援のご回答を頂き、今回、「臨床検査技師の大学院教育を考える：現役大学院生からのメッセージ」というタイトルで、シンポジウムを開催するに至った。周知のごとく、現在、臨床検査教育施設(4 年制大学)に併設した大学院で学んでいる学生は、4 年制大学卒業生だけに限られてはいない。3 年制養成施設の卒業生で規定の臨床経験などの基準を満たしている学生等も含まれ、その背景は極めて多彩である。そこで、今回のシンポジウムではできるだけ多様な背景を持つ現役の大学院生をシンポジストとして選考し、様々な環境の中で研究に打ち込んでいる現状を報告して頂くこととした。

フルタイムの大学院生としては 2 名の演者にお

\*熊本大学大学院生命科学研究部生体情報解析学分野  
日本臨床検査学教育協議会 大学・大学院教育部長  
okumiyat@kumamoto-u.ac.jp

願いした。山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程2年生の原 和冴氏と名古屋大学大学院医学系研究科医療技術専攻博士後期課程2年生の藤井亮輔氏である。両氏とも所属大学院の特殊性や大学院生としての学ぶべき姿勢に関して明快で力強い発表が行われた。学生ではあるが理路整然とした立派な発表で、次世代を担う他の学生達に対しても非常によい刺激になったものと確信した。社会人の大学院生としては3名の演者をお願いした。信州大学大学院医学系研究科博士課程の重藤翔平氏は、大学病院の臨床検査技師として働きながら博士号取得に向けて研究に精励されている様子が充分伝わってきた。また、学部卒業後の修士課程での基礎的な研究手法や論理的思考について学んでおくことの重要性が強調された。残る2名は臨床検査技師教育施設で教鞭をとりながら大学院で研究を実践されている方々である。高知大学大学院総合人間自然科学研究科医科学専攻の博士課程で研究されている中村泰子氏と岡山大学大学院保健学研究科博士課程の中原貴子氏は、臨床検査技師を教育する教員としての責務を持ちながら博士号取得に向けて奮闘されており、「教

える立場」と「教えられる立場」の両立の難しさが十分に伝わってきた。しかし、それ以上に教員として大学院で研究能力を磨くことが、引いては教員としての教育能力の向上につながることを強調されたことが印象深かった。

今回、司会進行役として、大学・大学院教育部会から佐藤雄一教授(北里大学)と横田浩充教授(東邦大学)をお願いした。本来であれば、両教授に本原稿をご執筆頂くべきであるが、大会長の坂本秀生教授(神戸常盤大学)と本誌編集委員会委員長の松尾収二教授(天理医療大学)のご指示により、今回、企画立案の段階から関与した私が執筆することとなった。初めての試みであったが、多くの方々がシンポジウムに参加して頂き、活発な質疑応答も行われ実り多きシンポジウムとなった。本協議会会員の方々の大学院教育に関する強い関心と今後の在り方に関する思いが伝わってきた。大学・大学院教育部会を代表し、ご講演頂いたシンポジストの方々、当日、本シンポジウムに参加して下さった多くの皆様方に心より感謝の意を表したい。